

〈国策〉への接近／抵抗としての混淆

——久生十蘭『紀ノ上一族』論——

脇坂健介

はじめに

久生十蘭の小説『紀ノ上一族』は、一九四二年に発表された三短編を一九四三年に三部構成の連作として改稿・編纂し、単行本化した作品である。紀ノ上から移民してきた松右衛門をはじめとする一族がアメリカで排斥されていく姿を「第一部 加州」、「第二部 巴奈馬」、「第三部 紀ノ島」という三部構成で描いた本作は、「戦争のさなかに発表された諸篇」として戦争との関係が取り上げられることもある作品である。^{注2}だが、『紀ノ上一族』は一九〇六年から一九二〇年までのアメリカや南米、カリブ海を舞台にした作品であり、リアルタイムの日中戦争や太平洋戦争を描いた作品ではない。そうした作品内の時間と現実の不一致にもかかわらず、『紀ノ上一族』と戦争の関係が問題になる理由としては、作中における排斥される日本人／排斥するアメリカ人の戦いが、現在進行形の太平洋戦争とそれを招いたと当時報道されていた日米の対立構造を想起させるこ

とが挙げられるだろう。実際、一九四三年七月一日の東京朝日新聞には「忘るな米の暴虐 あす排日法実施十九年」の文字が踊り、同年七月二日の読売報知では「世界の獣国アメリカ 排日移民法の暴虐の忘るな」と見出しが打たれていた。更にその直前の六月二八日には同じく読売報知が排日移民法を指して「大東亜戦争の遠因」と報じてさえたのだから、作品に描かれた排日運動は単なる過去の事件ではなく、現在の対米戦争を遂行するための扇動と直結したものとなっていたことは間違いない。

だが、『紀ノ上一族』と戦争の関係が指摘されるのはそれだけが理由ではない。むしろ、命を賭けてアメリカとの戦いに挑む日本人という内容が、戦時における様々な規範と共鳴していることこそがそうした読みを可能としているのである。『紀ノ上一族』には、「日本のため」に命を賭す一族の姿が、戦時下における「一死君国」的な風潮と共鳴していると見ることもできる部分があり、それゆえその評価には、同時代における反米

や戦争遂行の宣伝という面をどう考えるかという問題がつきまとうことになるのである。

たとえばこの点に関して、中井英夫は「久生の代表作の一つ」に本作を上げつつも「大道書房から刊行された単行本には、表紙にも赤字で『アメリカの暴虐』という副題が刷り込まれて」いたことを指摘したうえで、「作者の意図はもとよりそこにはなく」、「この当時あふれていた安手の戦争賛美の御用文学からは遠く離れた地点での確かな仕事となつて」といふと「戦争賛美の御用文学」との距離を主張し、作品を評価しようとしてい^{注3}る。また、川村湊は「『紀ノ上一族』が戦時中の〈反米宣伝〉の一環として書かれ、発表されたことは紛れもなく、『亜米利加の誤った文明』に対する誹謗、過度な日本精神の強調は、この頃の〈国策〉に合致した文学の特徴をはつきりと示している」としつつも、「現在から見ると、この作品ほど、現代の国際的なポードレスの世界の問題点を凝縮して描き出した小説は、日本の近代文学史においてもなかった」とし、「ポードレスの『移民』『難民』を扱」い「しぶとく打ちかかつてゆくマイノリティー（社会的少数者）の姿を描き出したということ」を評価する^{注4}。更に、川崎賢子は「米国の排日運動と日本移民への様々な弾圧の情報」が、敵愾心をあおるために利用されたと指摘する一方で、「それらの言説のなかにあって『紀ノ上一族』の特徴は、民族的対立を米国対日本という国家間の対立の枠組みに収斂させ」ず、「国家の庇護を離れ祖国から忘れられた移民たちと、大国支配に抵抗する周縁部の諸民族との交流という

「虚構の物語」を作り上げた「不服従のよりどころとしてのナシヨナリズムの物語なのである」と論じている^{注5}。

しかし、このように「『紀ノ上一族』を高く評価する論考がある一方で、日比嘉高はこの作品を「日米戦争下の国粹的イデオロギーに染まった」作品としている。日比は「在米の日系移民のアイデンティティは複雑であり、単純に日本人と同一化することはできない」はずだが、『紀ノ上一族』は「移民たちの現実の経験と歴史、そこから導かれる自己規定の難しさを一顧だにすることなく、作中において単純に彼らを『日本人』として語」る作品であり、「日米戦争下の思想戦の一部として」、「日本（人）」の倫理的、優美的な優を説きながら、にもかかわらず優れた日本人が虐殺されていく、不条理^{注6}を書きつらね、感情的な反発へと読者を導く」作品だと断じ、厳しい評価を下している。

このように『紀ノ上一族』の評価は大きく分かれているが、同時にこれらの論には共通の問題意識があることを見逃すわけにはいかない。それはいずれの論考でも、『紀ノ上一族』と日米戦争下における日本の〈国策〉との距離の有無が問題化されているという点である。すなわち「マイノリティー」である移民が「国家間の対立に収斂」されず、「不服従のよりどころとしてのナシヨナリズム」を発揮したものとしてみるにせよ、「国粹的イデオロギーに染まった」作品としてみるにせよ、『紀ノ上一族』と日米戦争下における〈国策〉との距離は、作品を評価するにあたって重要だと考えられているのだ。

ただしこのような〈国策〉との距離を考察する際には、作中で繰り返し言及される〈日本〉および〈日本人〉をどのように捉えるかが問われなければならないだろう。つまり、一族の言動に含意されている〈日本〉が戦時下の大日本帝国の〈国策〉と親和的であるならば、「マイノリティー」たちの「不服従のよりどころ」としてのナショナリズムも〈国策〉へと容易に回収される恐れがあることになり、逆に一族が志向する〈日本〉と大日本帝国の〈国策〉との間に何らかの差異があるならば、移民の想像力が戦時下における〈日本〉のイメージになんらかの変化の余地を忍び込ませていると考えることもできるからだ。そこで本稿では、作中で一族が志向する〈日本〉および〈日本人〉について、一族の様々な政治的な立場の変化と絡ませて分析してみたい。そしてその上で、作品の発表時である戦時下の歴史をとりあげつつ、その中でも特に「玉碎」や「死君国」的な言説と、一族が志向する〈日本〉および〈日本人〉への意識の関係について明らかにしていく。

1 翻弄され続ける一族

三部構成の単行本『紀ノ上一族』は、それぞれ登場人物の多くが入れ替わり、舞台・作中時間が異なる複雑な内容をもつ作品である。そのため、詳細な検討に入る前に、まず『紀ノ上一族』の概要を記しておくことにしたい。

『第一部 加州』は一九〇六年、松右衛門をはじめとする紀

ノ上村の五十二名が、カリフォルニア州「農事局の招聘」で「日本水稲」の植付けに向かう船上から物語が始まる。ところが到着した彼らが見たものは、地震と火災によって崩壊したサンフランシスコの姿であった。荒廃したサンフランシスコの秩序回復に手をこまねいた市当局は、「人心の激化を日本人排斥運動の方向へ誘導し」ようとし、更に「虚構の恐日宣伝を合理化するため」に暴動事件をでっちあげ、一族から伊佐吉をはじめとする二九名と、彼らを助けようとして投石を受けて記憶喪失になってしまった「過去忘太郎」こと山田利三郎を逮捕し、流刑にしてしまう。だが流刑先で伊佐吉たちは、メキシコ「国粋軍」に助け出され、間近に迫っていると報道される日米戦争に貢献すべく、「国粋軍」に参加し共にアメリカと戦うことを決意する。ところが、日米関係の急激な改善によってカリフォルニア奪還の計画が頓挫した「国粋軍」は、邪魔になった伊佐吉たちをアメリカに売ってしまうのだった。孤立無援となった伊佐吉たちは「死の谷」へと追いやられ、そこで砂に埋もれて死んでいく。

『第二部 巴奈馬』は、一九一三年のアメリカ支配下のパナマ運河を舞台に、ドイツ人医師ゲルゲの視点で物語が語られる。パナマに派遣されたゲルゲは、パナマ運河を爆破した罪で死刑宣告された一組の黒人少年たちと出会う。法廷で少年たちが口にした言葉を、かつて紀ノ上地方に滞在していたことがあるゲルゲは紀ノ上の方言だと察知し、少年たちが黒人ではないことに勘づく。彼らの秘密に気づいたために軟禁されたゲルゲ

は、そこで先任の医師リヒターから、流刑になった伊佐吉たち以外の紀ノ上の一族が南米を放浪し、その後、アメリカに戻って土地を借りたものの、排日土地法の施行によって土地を奪われたことを聞かされ、間一髪で強制送還から逃げ出した松右衛門の子供である二三松たちこそが黒人少年の正体であり、実は彼らはアメリカ共和党一味に利用されているのだと知らされる。すなわち、アメリカ共和党の一味が二三松たちに日米関係の悪化を吹き込んで、パナマ運河の爆破をやらせたというのである。しかも、それを知ったウイルソン大統領は、日本人として二三松たちを処刑すれば日米関係が悪化することを憂慮し、肌をタールで黒く塗らせて黒人として処刑しようとしているのだ。一連のアメリカの陰謀を知ったゲルゲは怒りに震えるが、「日本の役にたつた」と信じて処刑台に向かう二三松たちの「国民精神の崇高さ」に彼が「うつとり」としたところで、物語は幕を閉じる。

最後の「第三部 紀ノ島」は、一九二〇年のカリブ諸島の小島を舞台に、一族の親戚である吉次郎の視点から松右衛門たちの最期が描かれる。排日土地法によって土地を失い、二三松たちとも別れた松右衛門たちは、カリブ海に浮かぶ小島をデンマーク政府から購入し、ブラジル生まれの子供・芳松らと暮らしていた。彼らから手紙を受け取った吉次郎と松右衛門たちに島を紹介した新井槐南は「紀ノ島」と名付けられた島に向かい、そこで恐るべき事実を告げられる。なんと「紀ノ島」はアメリカのパナマ運河防衛の邪魔になっているために、連日空爆を受

けているというのである。島から脱出するべきだと松右衛門たちを説得する吉次郎だが、「紀ノ島」を「天子さまからお預かりした土地」「日本の領土」だと考える松右衛門は脱出を拒否。そして空爆の中で日本国旗を振り続けることで、自分たちの存在を主張するのだと決意を語る。「大日本帝国りやうど」と記された石標を島に埋め、吉次郎に芳松たちを脱出させてくれるように依頼した松右衛門は空爆の中で日本国旗を振り続け、爆風の中に消えていく。

このように要約してみると、『紀ノ島』は様々な年代の歴史を背景として取り込みながら、アメリカによる排斥と、それに抵抗し、〈日本〉に貢献しようとする一族の姿を描いているように思える。しかし、そのように即断する前に、第一部から第三部までの一族の立場の変化とその原因に注目するべきだろう。

まず「第一部 加州」の冒頭で一族は、日本水稲の植付けのためにカリフォルニア州「農事局に招聘」され、「県の農事課」によって選出された人々だと説明される。この時点で、一族の立場は同じ移民船に乗っていたハワイからの「転航移民」のような、求職のために渡米する移民とは異なっていることが示されている。だが、こうした一族の特権的な立場はサンフランシスコ市当局が行った排日宣伝によって「市民の既得職業」を奪う労働者移民へと強引に変更されることになる。こうした立場の変化を伴う「市長一派の巧妙な芝居」によって、伊佐吉たちは流刑に処されることになるのだが、重要なのはこうした一族

の立場の変更が、その時々々の政治情勢の変化によって、一族の意志とは無関係に引き起こされているという点だ。

こうした政治情勢の動きには、確かに歴史的な事実がある程度踏まえられている。例えば第一部で一族の立場を変化させる要因になった排日運動について、作中では、過去にあったサンフランシスコの労働組合による「支那人排斥運動」に触れているが、実際、カリフォルニア州では中国移民が増加する一方で、アメリカ経済が不況に見舞われ、雇用環境が悪化したために、デニス・カーニーが立ち上げた「中国系移民の排斥を公約に掲げる労働者党」が「カリフォルニア州の全域で支持を集め」ることになったという。^{注8} しかも、雇用問題に端を發した差別は日露戦争の勝利以降、中国人から日本人へと移ることになり、特にサンフランシスコでは、中国人排斥という「排斥運動の伝統」が出来ていたために、日本人移民への排斥が活発に行われ、一八九二年にはデニス・カーニーが「日本人は出ていけ！」の說法を始め、一九〇〇年には市議会で「日本人移民制限の決議」が可決されることになったのだ。^{注9} だが、作中では、こうした歴史的背景を取り込む一方で、市当局が日本人排斥運動を地震で動揺した人心をおさえる目的で利用したとも語られている。つまり、市当局は政治的思惑によって排日運動を利用しながら、本人たちの意志とは無関係に一族の立場を招聘された農民から排日の標的である日本人労働者へと変更してしまうのである。結果的に（日本）から旅立った一族は、招かれたはずのアメリカからも排斥され、自らの拠り所を失うことになるのだ。

しかもこうした立場の変更は、流刑になった伊佐吉たちが、作中では「国粹軍」（筆者傍点）とされているメキシコ革命軍に加わったときにも起こる。ここでメキシコ革命軍は日米関係の悪化を契機に、アメリカに割譲された領土の回復を目論み、解放した伊佐吉たちを自分たちの仲間へと勧誘する。伊佐吉たちも戦いに参加することが、来たる日米戦争の際に「日本のため」になると考え、革命軍に加わることになる。だが、一度は伊佐吉たちを「兄弟」として迎え入れたはずの革命軍は、先述したように「無益有害」となった伊佐吉たちを切り捨てることになるのである。つまり、伊佐吉たちの立場は、招聘された農民から排斥される日本人労働者に、更にメキシコ革命軍の「兄弟」から、彼らにとつて「無益有害」とされる邪魔者へと変転するのだ。そしてそれは、いずれも日本・アメリカ・メキシコの国際的政治力学の変化に翻弄された結果なのである。

同様の事態は「第二部 巴奈馬」でも起きる。排斥の憂き目にあつた後、親からも離れ、南米を放浪する二三松たちは、「日米戦争の危機」を焚きつけられ、パナマ運河を爆破する。だが、それはパナマ運河に利権を持つ共和党が、日米戦争の危機と日本人による爆破事件を重ね合わせることで、パナマ運河の防衛予算を確保しようとした陰謀に踊らされたからなのだ。しかもその後、日米関係の悪化を危惧した民主党ウィルソン大統領は、二三松たちを日本人として処刑することを禁じることになる。つまり、二三松たちはアメリカ国内の共和党・民主党の政争に巻き込まれ、運河を爆破した日本人に仕立て上げられたか

と思えば、今度は日米関係の変化に伴って、肌を黒く塗られた黒人少年として処刑されることになるのである。

このように第一部、第二部で描かれる伊佐吉たちと二三松たちの政治的立場は、日米関係のみならず、メキシコやアメリカ国内の政治状況によっても、めまぐるしく変化する。しかも、その変化には伊佐吉たちや二三松たちの預かり知らぬ様々な政治的判断や陰謀が介入しているために、本人の意志とはほとんど無関係に立場は変更されることになるのだ。それでもなお、彼らはそうした政治的運動によって翻弄されながらも、「日本のため」に戦おうとするのだが、しかし実際のところ、なぜ彼らが「日本のため」に戦うのかという個人的な動機や理由はほとんど作中に描かれていない。そして、その動機の欠如を埋めるかのように伊佐吉たちが流刑先で反撃に転じる際には「日本人の血液と自尊心」が取り上げられ、二三松たちも、「日本のためなら、いつ死んでもかめへんぞい」と言ってパナマ運河の爆破に向かうのである。つまり、一族が命を賭けて「日本のため」に立ち上がることは、あたかも「日本人」として当たり前の行為であるかのように語られているのだ。こうした一族の態度は、不安定になる立場を何とか「日本人」としてのアイデンティティへと着地させようとする試みであると考えられることもできる。しかし、『紀ノ上一族』には、必ずしもそうとも言い切れない要素も存在しているのだ。そうした様相を明らかにするために、ここでは日米戦争下における軍人の死との対比を試みてみたい。

2 戦時下における「軍神」と「玉碎」／「日本のため」の死

先述したように第一部で、排日の憂き目にあった伊佐吉たちは「いま、まさに始まらうとしてゐる日本の対米戦争の全軍作戦」に「良好な影響」を与えるべくメキシコ革命軍に参加する。同じく第二部において二三松たちは、ジャクソンなる人物（のちに、アメリカ側の工作員と判明する）から「日米戦争の危機迫る」という新聞記事を見せられ、「お前達の村のものは『死の谷』へ追ひこまれて全滅」し、「お前達の家族は土地を奪られて日本へ追ひかへされた」のに「アメリカへ仕返ししようとも思はないのか」と焚きつけられ、「日本のためなら、いつ死んでもかめへんぞい」とパナマ運河の爆破を実行する。

あたかも自明であるかのように語られる「日本人」だから「日本のため」に命を賭けるのだという一族の姿勢は、発表時期における〈国策〉との距離を考える上で重要な問題をはらむことになるだろう。陸軍歩兵への教育を分析した荒川章二によれば、一九二八年に改訂された『歩兵操典』において、第一次大戦で明らかになった「欧米列国との格差」を埋めるための「精神主義の強固な再確立」と、それに基づく、兵士の命を軽視する「白兵戦重視の攻撃主義」が選択されたという。そして、こうした思想は戦局の過熱化によって強化され、一九三八年に制定・公布された『作戦要務令』では「一死報国的で、合理的な作戦判断を阻むほど精神主義的文面が付加」されることになり、更にその延長線上に、「死の覚悟と死の命令」が明記され

た一九四一年の『戦陣訓』の制定があるという。^{注10} この『戦陣訓』の制定後の一九四二年に雑誌各誌に発表され、翌四三年に単行本化された『紀ノ上一族』において描かれた「日本のため」の死とそれを正当化する語りは、こうした戦時下における軍人たちの死と響き合う可能性があるのだ。

実際、初出の発表に近い一九四二年三月七日には「軍神の誕生がこれほど大々的に報じられたのは、この時が初めてであった」とされる「九軍神」が各新聞に登場している。^{注11} 「九軍神」とは真珠湾攻撃の際に五隻の小型潜水艇で日本軍初の特攻を試み、戦死した兵士たちのことだが、大本営はこの前日に彼らを軍人の鑑たる「九軍神」として発表した。これを受けて、例えば七日の大阪毎日新聞では、「帰還」を念頭におくことのない「特殊戦法を着想」し、その作戦通りに「散華」した「九軍神」の「尽忠報国」が称賛されている。そして更にその決死の特攻が、「敵の心胆を寒からしめる」のみならず、「我が国内においても一部には未だ英米的な私利希求の思想皆無」ではない現状にあつて、「果然警世の鐘と響い」たと記しているのだ。しかもこの記事は、「この精神が活きた同じ時代に生き同じ時代に呼吸せるとは我らが無言の感謝と熱涙をもつて」迎えるべき「誇り」であり、「われら皇国民は永遠にこの軍神の精神を龜鑑として萬進すべきである」と締めくくられているのである。山室建徳によれば、こうした「九軍神」の姿は「一身を作戦成功のために進んで捧げ」ることに「英米とは異なる日本独自の精神」を見出し、「英米の精神を自らの中から一掃する」という

「恰好の規範」を示したものであったという。また「最初から死ぬ決意を固めて、事前に計画を立て準備を整えた点で、これまでにない新しい軍神」であり、「現下の戦争で実践すべき自己犠牲の模範を示す存在」だったというのだ。^{注12}

また、単行本の出版にほど近い一九四三年五月には「玉碎」という表現が初めて使用されたとされるアツツ島の守備隊の全滅が報道されている。^{注13} 同年五月三十一日の読売報知はアツツ島の「玉碎」を「皇軍の神髓こゝに發揮 あ、何んたる崇厳！何んたる壮烈！」と銘打ち、社説では「戦陣訓の大精神はアツツ島の守備の皇軍によつて完全に実践され」たと報じている（傍点筆者）。同日の東京朝日新聞もまた「皇軍の神髓を發揮せん」とした守備隊を称賛し、そこに「敵胆奪ふ大和魂」を見出す。同じく五月三十一日の東京毎日新聞は「玉碎」を「神州の国士に培つた大和魂の時を得ての華々しき炸裂であつた」と報じており、やはり「戦陣訓をそのまゝ、実践したものであります」（傍点筆者）と記し、「アツツ島における将兵の志は直ちに吾等一億臣民が受継いで立たねばならぬ」と読者に訴えかける。こうした主張は、「この忠霊に応ふる道はたゞ一つあるのみ、一億火の玉となつて米英撃滅、戦争完遂の大道を直進することこれである」とする同年八月二十九日の東京毎日新聞にも見ることができらう。

このように戦時下において「九軍神」は「模範」となり、アツツ島の全滅はまさに戦陣訓の精神を体現した「皇軍の神髓」、「大和魂」の発露として位置づけられた。そうした当時の報道

について山室は、「九軍神」は「具体的な戦果がほとんど検討され」ず、「日本人の精神のありようが、実際に何を成し遂げたかとは切り離され、極めて精神主義的に語られた」と述べる一方で、アッツ島の全滅に関する当時の論調については「敗北だったにしても、その死に方によって日本の美しさを示せた」ことが称賛されたと指摘しながらも、「その死は勝利と結びつくとも見られ」ていたと論じている。^{注14}

山室が述べるように、軍人の死は精神主義的に美、学、化され、戦陣訓の精神もこうした報道を通して国民の間に広がっていったと見ることができるとは、のみならず、そうした死を英米とは異なる「日本独自の精神」や「皇軍の神髄」と結びつけることで、「日本人」ならば死もいとわず戦わなければならないという規範を流布することになった。ただし「九軍神」について「具体的な戦果がほとんど検討され」なかったという山室の指摘は、「九軍神」とアッツ島の「玉砕」が「皇軍の神髄」や「大和魂」の発露として称賛されるその裏側に、軍事的成果の乏しさがはりついていることを浮かび上がらせることにもなるだろう。実際、軍事的な成果がほとんど報道されなかった「九軍神」の場合もそうだが、まぎれもない軍事的敗北であるアッツ島の「玉砕」も、軍事的成果に目を向ければ本来はとうてい称賛に値するものとはいえない。つまり、彼らの死を〈日本人〉の精神の発露として美学化することは、軍事的成果の乏しさを隠蔽する機能をもっていたのであり、更にいえば、隠蔽を可能にする「精神」を喧伝することで国民の戦意を高揚させる効果を狙ったも

のでもあったといえるだろう。

こうした同時代の状況と比較すれば、「日本のためなら、いつ死んでもかめへんぞい」と豪語する二三松たちや、「やむに止まれぬ熱情」から、「日本のため」にとメキシコ革命軍に加入した伊佐吉たちの態度は、〈日本人〉なら「日本のため」に命を賭けるのは当たり前だという論理を採用している点において戦時下の規範と共鳴していることが分かる。また第三部において「天子さまからお預かりした土地」なのだから「生命を捨て」る覚悟で守るといふ松右衛門や、「たゞ死なんならん」と思い、それが「臣の道」であると語る源十にも、「玉砕」と結びつけられた〈日本人〉の「精神」の強調を見て取ることもできるだろう。

だが、その一方で『紀ノ上一族』が明らかにするのは、こうした規範が覆い隠そうとした、〈日本人〉として「日本のため」に命を賭けた結果がもたらすこの上ない〈無意味〉なのである。第一部において伊佐吉たちと行動を共にして国粋軍に加わる過去忘太郎（山田利三郎）は、日米開戦がなくなったことを知って、自分たちの戦いから「日本のため」という大義名分が失われたことを悟り、「墨西哥人のまゝで殺されるのはいやだな」、「せめて日本人で死ぬるんならい、けど」と嘆くことになる。その直後に革命軍によってアメリカに売りわたされる伊佐吉たちは、政治情勢の変化に振り回された拳句に、いかなる大義も結果も残すことができない惨めで〈無意味〉な死を迎えることになるのである。また、第二部では、「日本のため」におこなっ

たはずの二三松たちのパナマ運河の爆破が、アメリカによって仕組まれた陰謀であることが明らかにされている。もちろんそれでも「国民的自尊心で貫かれてきて、他人から日本人らしくないやつと言はれることをなにより恐れる」とされる二三松たちは、「心から祖国を愛し、なんではあれ、自分らの仕業がいくぶんでも日本の役にたつたと固く信じ」てはいる。しかし語り手のゲルゲは「お前たちのしたことは何の役にも立たなかつたといひ聞かせても決して相手にしなからう」と二三松たちの行動の〈無意味〉さを指摘しているのだ。ゲルゲは、「国民的自尊心」を抱いたまま、黒人として処刑される二三松たちをみて「うつとり」とはするが、一方ではその「国民的自尊心」に裏付けされた行動と死が「日本のため」にはならない〈無意味〉なものであることもはっきりと語っているのである。いわば一族の「日本のため」の死は、こうした〈無意味〉さが強調されることによって、「九軍神」やアツツ島の「玉砕」といった死の美学化が戦力の乏しさを押し隠すためのものであったことを浮き彫りにする可能性を持っているのだ。

ただし、そうした〈無意味〉な死の強調も、成果ではなく「日本のため」に決起したことこそが「国民精神」の發揚だと称揚する言葉に覆われてしまうならば、先の「玉砕」の言説と変わることはない。〈無意味〉な死が第二部においてはゲルゲという外国人の語り手によって「国民精神」の称揚にすり替えられたと読める可能性があり、第三部では同胞である日本人の吉次郎によって称賛されていることからすれば、いかにその死の

〈無意味〉さが強調されていたとしても、『紀ノ上一族』が〈国策〉に沿ったプロバガンダ小説であるという評価を覆すには十分ではないだろう。^{注15}しかし『紀ノ上一族』には戦時下の〈日本〉から隔たるもうひとつの要素が描かれている。それは母国から離れた一族が死を賭してまで紐帯しようとする〈日本〉と、實際の大日本帝国との間に生じている齟齬の問題である。

3 混淆される〈日本〉——〈一体化〉への抵抗

「国民精神」が称揚される第二部において、二三松たちは最後まで「自分らの仕業がいくぶんでも日本の役にたつたと固く信じ」、「日本の役にたつた」と信じたまま、絞首台に向かうことになる。日米関係の改善を知って絶望した伊佐吉たちと違い、二三松たちは「日本の役にたつた」と信じたまま死んでいくが、この時に彼らが貢献したと信じ込んでいる〈日本〉とは、パナマ運河爆破の直前にジャクソンなる工作員から吹き込まれた、今まさに日米戦争の危機に直面している〈日本〉であるはずだ。しかし、二三松たちが黒人として処刑されるのは、既に指摘しておいたように、日米関係の悪化を懸念したウィルソン大統領の意向によるものなのであり、こうした作中の記述を素直に読む限り、ウィルソンが日米開戦に踏み切る可能性は高くはないと考えられる。ところが二三松たちは、こうした政治状況の変化やアメリカ国内の民主党・共和党の抗争という複雑な情勢を理解することができず、いわば自己満足に浸ったまま処

刑されるのである。

もし、二三松たちがこうしたアメリカ国内における政治状況の変化を察知し、日米関係の悪化回避のために、黒人として処刑されることを受け入れているのならば、彼らの死は〈日本〉とアメリカの戦いを回避するための尊い犠牲として称揚するところが可能になるだろう。ところが二三松たちは民主党の大統領ウィルソンによるこのような戦略を知らされていないばかりか、共和党が彼らに吹き込んだ情報肥大させて日米開戦の先駆けだけでなく、カリフォルニアの土地禁止法で土地を奪われた日本人移民の復讐を果たし、〈日本〉のためになったと勝手に信じ込んでいるのだ。しかも、これも既に述べておいたように運河の爆破は、運河建設の遅延の隠蔽と防衛予算をつけるための共和党側の陰謀を発端としている。この視点に立てば、爆破自体が〈日本〉のためになったという確信のもとで受け入れられている二三松たちの死は、単に〈無意味〉なだけではなく、そもそも実際の〈日本〉とは無関係だとさえいえるのである。実際に起きている事態とは無関係に、日米戦争へ貢献したつもりになったままで死んでゆく二三松たち。そこから浮かび上がるのは、彼らが念頭に置いている〈日本〉と、実際の〈日本〉との大きな隔たりなのだ。

ゲルゲはこうした政治状況の変化を「大人の世界の醜悪なからくり」と揶揄し、「日本の役にたつた」と信じる「子供達の純真な信念」を崩す必要はないと語る。ゲルゲのこうした語りは、アメリカの戦略や陰謀を「大人」の「醜悪」な「からくり」

と批判し、二三松たちの〈日本〉への「純真」な思いを称賛する語りとして読むことができる一方で、「大人」と「子供」の間に深い溝を描いていると見ることが出来るだろう。このように政治状況のめまぐるしい変化と、それを理解できない二三松たちの間の溝が描き込まれることで、二三松たちが志向する〈日本〉の異質さはいっそう際立つことになるのだ。

こうして双方の間にある溝によって強調されるありもしない〈日本〉への志向性は、第三部でより顕著になる。「日本の領土」を守るために戦うという松右衛門たちは、自分たちの行動を正しいと感じながらも「万一こんなことで日本と米国の間に面倒なことが起こるやうなことがあつては自分等の本意にたがふので、このいきさつは誰にも知られたくなかつた」と語り、「この事件は今後、少くとも二十年は絶対に他言しないと約束してくれ」と島を訪れた吉次郎に迫る。第三部における松右衛門たちは、他の日本人移民とかかわりをもたず、購入した島に引きこもって戦いを続けているのだが、その戦いによって実際の日米関係に影響を与えることを嫌い、命を賭して「日本の領土」を守ることを当の〈日本〉にすら知らせようとほしないのだ。

確かに第三部の松右衛門たちの振る舞いは、島を守ろうとして全滅するという点では、実際の「玉碎」と響き合うような形で描かれてはいる。しかし、松右衛門たちがデンマーク政府から購入した私有地である「紀ノ島」を「日本の領土」と考えるのは、松右衛門が吉次郎と槐南に他言を禁じる以上、吉次郎とともに島から脱出する松右衛門たちの子供（≡芳松たち）など、

わずかな人々でしかない。つまり、松右衛門たちは、「紀ノ島」という「日本の領土」のためにアメリカと闘うが、実際の「日本」はこの戦いどころか「紀ノ島」の存在すら知ることはないのである。当然、「紀ノ島」を「天子さまからお預かり」した「日本の領土」とする松右衛門の考えも、公式に日本政府や天皇に認められたわけではなく、全て松右衛門たちの想像によってつくられた〈設定〉にすぎないのである。

こうした松右衛門たちの想像と戦時下の関係を考察するためには、同時期の移民たちの活動や戦時下における南方占領について触れておこう。たとえば塩出浩之はブラジル移民の社会が特に一九二〇年代以降、頂点に「行政機関としての日本領事館」をおく「日本の飛び地」のような様相を呈していた一方で、ほとんどの一世は「将来の帰国」を願望しており、その「帰国熱」は、一九三〇年代から四一年にかけてブラジル国内の排日が政策として実行されるに従って強くなっていくと指摘している^{注16}。また、北米に移民した日本人たちの中には、自分たちの存在を日本民族の膨張や発展における先駆者と位置づける一方で、「アメリカのフロンティア開拓民」としても描き出すことで、日米両国のどちらにでも通用する立場を構築しようとした者もいたという^{注17}。このように海外に移民した日本人たちは、それぞれの受け入れ先の国家と母国との関係の違いによって、同じ移民でも全く違うアイデンティティを構築していた。だが、こうした移民の複雑性に対して、母国・大日本帝国は一九四〇年に日本人移民たちの代表を招いて東京で大々的に開催された海外

同胞大会において「日本民族の必然的な拡張」を唱え、移民たちに対し「祖国への滅私奉公」や「日本の政策への支持の表明」を訴えたという^{注18}。「海外発展のそれぞれ異なる軌跡を一堂に集め」た上で彼らの経歴を「一枚岩的な帝国主義的膨張という壮大な物語に変えてしまった」^{注19}この式典によって、海外の移民たちの多様な活動は戦時下の大日本帝国へと〈包摂〉され、日本民族の膨張という紋切型の物語として称揚されるに至ったのである。

また、太平洋戦争の勃発に伴って「大東亜共栄圏」の名の下に、東南アジアへの侵略が行われたが、その「共栄圏」という美名に反して、占領地における「独立」や「自治」はあくまでも「日本の指導や統治のもとで与えられる」ものへとすりかえられた。一九四三年の御前会議で決定した「大東亜政略指導大綱」において、マラヤやジャワ、ボルネオなどは「帝国領土」とすることになり、特にマラヤでは「最も徹底的に日本文化への同化」が行われ、様々な政策が行われたという^{注20}。結果的に占領された南方の土地もまた、日本を頂点とした「統治」か「日本化」をもって支配されることになったのだ。

こうして移民たちや東南アジアの人々は、民族の膨張や「大東亜共栄圏」という一枚岩的な物語によって、戦時下の〈日本〉に〈包摂〉されることになった。そして、「それぞれ異なる軌跡」を持つはずの移民たちは、〈日本〉から「日本民族の膨張」という物語を押し付けられ、母国へ「滅私奉公」することが要求された。また、南方の占領地は「指導や統治」、時には文化の

レベルにおける「日本化」によって〈日本〉の一部とされた。

つまり、戦時下の〈日本〉による〈包摂〉とは、移民や占領地に紋切型で一枚岩的な物語を押し付けることで、彼らの複雑性を捨象し、〈日本〉へ〈一体化〉することを求めるものなのである。そしてこうした戦時下の状況を鑑みれば、松右衛門たちが私有地にすぎない島を「日本の領土」と考え、その防衛のために命を賭けるという態度は注目すべきものとなるだろう。離れていても、自分たちは母国・〈日本〉と紐帯しているという想像力によって「紀ノ島」は「日本の領土」となるのであり、その領土の防衛のためには死んでもかまわないという松右衛門たちの態度は、戦時下における各地の移民や占領地の〈包摂〉と共鳴することで、〈日本〉への「滅私奉公」や「統治」を正当化する物語と親和的であるともいえるのであり、この点においては、移民の複雑なアイデンティティを単純化し、「感情的な反発」に読者を導いているという先の日比の批判は正鵠を射ているといえる。しかし、そうした松右衛門たちの想像力が、

戦時下における移民の〈包摂〉や南方支配と完全に一致するかといえそうとはいえないのだ。なぜなら松右衛門たちは日米間に「面倒」を起ささないために、母国・〈日本〉にさえ「紀ノ島」防衛の戦いを知らせないからである。実際、作品の末尾には「紐育タイムス」の記事が配されているが、そこで「紀ノ島」は「マリング島」と呼ばれ、空爆の事実も「猛烈な噴火」と報じられることで、松右衛門たちの戦いは事実上なかつたこととされているのである。結果的に〈日本〉と松右衛門たちの

紐帯は、松右衛門たち側から一方的に意識されるだけで〈日本〉側からは認知されることすらなく、戦時下における〈日本〉を頂点として移民や東南アジアを〈包摂〉しようとした実際の政策とはまったく異質な様相を呈しているのである。そしてこうした違いによって、松右衛門たちが考える〈日本〉と、実際の〈日本〉との間には大きな齟齬が生じることになるのだ。言い換えれば、松右衛門たちの紐帯する〈日本〉とは、松右衛門たちの想像力によって生まれた〈日本〉なのである。しかも、この想像上の〈日本〉と実際の〈日本〉の間の差異は、南米で生まれた松右衛門たちの子供⇨芳松たちの存在によってさらに拡大することになる。

たとえば島を訪れた吉次郎たちの前に、芳松と同様に南米で生まれた源吾や弘吉、亀太が「竹に短冊、七夕祭よ」と歌いながら登場するが、彼らは竹ではなく「赤や緑の紙片をつけた椰子の枝」を肩に担いでおり、七夕歌と竹という〈日本〉の文化が、南米生まれの芳松たちによって椰子という南米の要素と混淆されている様子が描かれている。また、吉次郎から贈られた桃太郎の絵本に描かれている川を見て、亀太は「これ、何ならい？」と疑問を浮かべ、弘吉が川だと教えると「こーない小川があるかい！川いふな、もつと、もつと、大きなもんやし」と亀太は反論する。亀太は更に、絵本に描かれた桃を見て「俺またココ（椰子の実）かと思うた……桃なんでもん、俺まだ見たこともない」と、南米生まれの自分たちの知見とは合わない〈日本〉の昔話に疑問を持つことになる。弘吉は「お父んが、

そういふとつたえ。日本にや、こゝな阿呆ンだらな大けな川は
あらへん」と龜太に説明し、桃についても「食ふと顎落ちると
いふとつたぜえ、お父んが」と語るが、彼もまた実際に川や桃
を見たわけではなく、全て父親から聞いたにすぎない。このよ
うに南米生まれの芳松たちは、父親から聞いた話をもとに母国
である（日本）を想像するのだが、その想像力には既に南米で
の記憶や知見が混淆し、実際の（日本）とは決して小さくない
ズレが生じてきているのである。

こうした南米と（日本）の混淆は芳松たちが話す言語にも及
んでいるが、それは実際の（日本）が占領地を（包摂）するた
めに普及しようとした（日本語）の問題とも深く関わる。安田
敏朗は、占領した東南アジアに「東亜共通語」としての（日
本語）を普及しようとした際に（日本語）の簡易化が真剣に議
論されたことを明らかにしている。安田の指摘で興味深いの
は、そうした簡易化の動きに対し、国内では「簡易日本語とい
う変種」を設けることは、「国体」に対する冒瀆^{注21}であり、占
領地における教育の最終目標として「日本精神」浸透^{注22}が置
かれている以上は、「連綿と続く『伝統』」を担った「純正な
日本語」で教育しなければならぬという抗議がおきたため
に、簡易化の動きが排除されたというものである。しかも、安
田は排除された簡易化の側も自分たちを「純正日本語に至る
前段階」と認識しており、「非『母語』話者で完結する日本語
形態を認めることはなかった」以上は「日本精神」を伝える
という大前提^{注23}からは逃れておらず、結局どちらも（日本語）

の「統制」という同じ地平に立っていたと言ってもよい」と
しているのである^{注21}。占領に際しては「異民族・異言語を『寛容』
に包摂」したともされるが、その背後には「日本精神」を背
負う「日本語」の普及という目的が隠され^{注22}ていたとも安田は
指摘しており、こうした歴史的な背景を参照すれば、紀ノ上方
言にスペイン語を混淆した「もつと、もつと、大きいなもんや
し」のような芳松たちのクレオール化したといえる言葉は、当
時（日本）が占領地において教育しようとした（日本語）ない
し、それを通じて普及しようとした「日本精神」をも「冒瀆」
しかねないほどに、逸脱しているといえるだろう。いわば芳松
たちの言葉は、（包摂）のための統制された（日本語）の枠か
らも溢れ出しているのである。芳松たちは、文化的にも言語的
にも南米と（日本）を混淆することで、統制の効いた一枚岩的
なイメージとしての（日本）や（日本語）を変容させる、複数
の（日本）や（日本語）を生み出し始めているのである^{注22}。

しかも、こうした二世たちによる南米との混淆は、松右衛門
たちの想像上の（日本）にも更なる変容をもたらすことになる
だろう。物語の後半で、松右衛門たちは「大日本帝国りやうど」と
記した石標と、父親たちの名前を刻んだ二つの石標を埋め、
「お主ら、早よ大きなつてこの石を掘りだし、この島が日本の
もんやつたといふ証」を立てると芳松たちに語る。こうして、
松右衛門たちの想像上の（日本）は、口外を禁じられたまま、
いつとは知れぬ未来における石標の掘り出しの命令を伴って、
芳松たちに受け継がれることになる。しかし、芳松たちは松右

衛門たちとは異なり、実際の〈日本〉を見たことすらない。一世の父親が受け継ぐように求めた〈日本〉は、父親たちの話に南米が混淆されることで、更に異なる〈日本〉のイメージを発生させる可能性があるのだ。石標を埋め終わった人々は、昇った朝日を見て「みな、東を向いて頭を垂れ、故国の山川のた、ずまいを心の中に思ひうかべ、あまりのなつかしさにたゞうつとりとする」のだが、この時吉次郎が語る「なつかしさ」という言葉はあたかも「みな」が同じ「故国」を思い浮かべているかのような錯覚を生むだろう。しかし「思ひうかべ」た「故国」が「みな」同じものだとする確証は、こうした異なる想像と文化的言語的混淆が既に引き起こされている以上は、『紀ノ上一族』のどこにも存在してはいないのだ。

おわりに

これまで述べてきたように『紀ノ上一族』は、反米や「一死君国」といった〈国策〉が肯定されている部分もあり、その点に注目すれば〈国策〉小説として読むこともできる。だが、そうした〈国策〉が求めた〈日本人〉の死が、変転する国際情勢に翻弄される一族に仮託されることで、むしろ「軍神」や〈日本〉の「精神」といった美名が覆い隠そうとした成果の無さ¹¹死の〈無意味〉が浮き彫りになっていくのだ。もちろん、それでもなお、こうした一族の〈無意味〉な死が〈日本〉への無償の貢献として称揚され、〈国策〉に再び〈包摂〉される可能性

もあるだろう。しかし、そうした〈日本〉への〈包摂〉を振り切るような〈日本〉を、南米生まれの芳松たちは生み出している。〈日本語〉とスペイン語が混淆した〈純正ではない〉言葉を操り、〈日本〉の昔話すら〈正しく〉イメージしきれない芳松たちが想像する〈日本〉の姿は、戦時下の〈日本〉による移民や占領地の〈日本〉への〈包摂〉と〈一体化〉をゆさぶり、その外に存在するかもしれない、異なる言語や文化と混淆した複数形の〈日本〉という可能性を露わにしているのである。そして、そのゆさぶりは、〈日本人〉に「玉砕」を命じ、殉じろと求める〈日本〉や〈日本精神〉とは何かを再考させることになるだろう。同時に、移民や占領地を〈日本〉に〈包摂〉する過程で抑圧しようとした、複雑なアイデンティティを浮上させ、それを〈日本への一体化〉に対置することになるだろう。つまり、『紀ノ上一族』に今なお読む価値があるとすれば、戦時下における〈日本人〉の規範や〈国策〉と共鳴し、異質なものを〈包摂〉する〈日本〉を描く一方で、その〈包摂〉からはみ出す混淆の姿を浮上させ、〈包摂〉を複数の異なる〈日本〉の出現へと変容させる可能性を示しているからなのだ。その合わせ鏡のような構造において『紀ノ上一族』は、一枚岩的な〈日本〉という統制の効いたイメージからの逸脱と変容の可能性を浮上させ、戦時下〈日本〉における〈国策〉¹²「一億火の玉」の前提となる〈日本への一体化〉を敗戦とはまったく異なる形で躓かせている作品なのである。

注

1 『紀ノ上一族』を構成する三部は、それぞれ「第一部

加州」が「死の谷」という題名で『モダン日本』一九四

二年十一月号、「第二部 巴奈馬」が「巴奈馬」として

『新青年』同年七月号、「第三部 カリブ海」が「太平洋

日本島」として『講談倶楽部』同年十月号に掲載された。

これら三つの短編が改題・改稿されたうえで一九四三年

六月、大道書房から出版された単行本『紀ノ上一族』に

おいて、「紀ノ上一族」という題名でまとめられた。な

お、「第四部 羅府」として収録されることもある。「最

後の一人」は、『青年読売』において一九四四年九月か

ら一九四五年一月に掲載された。最新の『定本 久生十

蘭全集4』（国書刊行会、二〇〇九年）は大道書房版を

『紀ノ上一族』として収録しており、本稿でも、この大

道書房版『紀ノ上一族』を議論の対象とし、「最後の一人

」や初稿の問題は別稿での検討を予定している。

2 中井英夫「戦争と久生十蘭」（『コレクション・ジュラネ

スク 紀ノ上一族』薔薇十字社、一九七三年）

3 中井前掲論文

4 川村湊「解説 滅びの一族 について」（『紀ノ上一族』

沖積舎、二〇一一年）。初出は川村湊「解説」（『紀ノ上

一族』沖積舎、一九九〇年）

6 日比嘉高「亡霊と生きよー戦時・戦後の米国日系移民日

本語文学」（木越治・勝又基編『怪異を読む・書く』所収、

国書刊行会、二〇一八年）

7 なお戦時下以外の歴史との対応関係、特に作中時間であ

る一九〇六年から一九二〇年代における諸問題との関わり

については別稿を留意したい。

8 浜本隆三『アメリカの排外主義』（平凡社、二〇一九年）

9 貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』（岩波書店、二〇

一八年）。無論、こうした差別には、有色人種を敵対視

する「黄禍論」が背景にあったことも指摘されている。

また、ゴルヴィツァーは「アメリカにおける黄禍論の歴

史は時期的には、はっきり二つの段階に分けられる」と

述べ、一つは白人の労働組合やカリフォルニア住民によ

る「中国人排斥キャンペーン」であり、もう一つは「日

本人排斥運動」であるとしている。（ハインツ・ゴルヴィ

ツァー『黄禍論とは何か』瀬野文教訳、中央公論新社、

二〇一〇年）

10 荒川章二「兵士たちの男性史」（阿部恒久・大日向純夫・

天野正子編『男性史2 モダンイズムから総力戦へ』所収、

日本経済評論社、二〇〇六年）

11 山室建徳『軍神論』（中央公論新社、二〇〇七年）

12 山室前掲書

13 吉田裕は、アッツ島が全滅した際の発表時に大本営が

「初めて『玉砕』という表現を使用した」としている。

- 15 14 『アジア・太平洋戦争』岩波書店、二〇〇七年。』
山室前掲書
- 15 外国人による「国民精神」の称揚の例としては、一九三二年二月二六日の東京朝日新聞による「世界を感動させた三勇士の最後の詳報」という記事が挙げられる。この記事では、第一次上海事変の際に自爆して軍の進路を作った「三勇士」を「外国記者はかく見る 日本精神の極致」として称賛する「タイムス」などの外国人記者の言葉を掲載している。
- 16 塩出浩之『越境者の政治史』（名古屋大学出版会、二〇一五年）
- 17 東栄一郎『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで』（飯野正子監訳、長谷川寿美／小澤智子／飯野朋美／北脇実千代訳、明石書店、二〇一四年）
- 18 ケネス・ルオフ『紀元二六〇〇年』（木村剛久訳、朝日新聞出版、二〇一〇年）
- 19 東前掲書
- 20 安達宏昭「『大東亜共栄圏』論」（大津透ほか編『岩波講座日本歴史第18巻 近現代4』所収、岩波書店、二〇一五年）
- 21 安田敏朗『帝国日本の言語編成』（世織書房、一九九七年）
- 22 言語の混淆という問題はクレオール化とも接近する。今福龍太は、クレオール化について「土着文化と母語の正統性を根拠としてつくりあげられてきたすべての制度や

知識や論理を、全く新しい非制度的なロジックによって無化」するような「革新するヴィジョンを生み出す戦略となる可能性」があると述べている（『クレオール主義』筑摩書房、二〇〇三年）。また、こうした移民の想像力について、上野俊哉は「ディアスポラ」という視点から論じている（『ディアスポラの思考』筑摩書房、一九九九年）。こうした十蘭における言語やディアスポラという問題の詳細についても別稿を用意したい。